大田市埋蔵文化財調査報告書　第29集

主要地方道仁摩瑞穂線（門谷工区）改良工事に伴う

石見銀山遺跡発掘調査

—宮の前地区調査概報—

２００３年3月

島根県大田土木建築事務所
島根県大田市教育委員会

大田市埋蔵文化財調査報告書　第29集

主要地方道仁摩瑞穂線（門谷工区）改良工事に伴う

石見銀山遺跡発掘調査

—宮の前地区調査概報—

２００３年３月

島根県大田土木建築事務所
島根県大田市教育委員会

石見銀山遺跡全景（上空北から：▼印が調査地点）

序　　文

石見銀山遺跡は16世紀に開発された国内有数の銀山であり、その遺跡は今日、日本を代表する鉱山遺跡として平成14年３月にはユネスコの世界遺産暫定リストに登載された遺跡であります。

開発から400年という長期間にわたって銀が生産され、大正12年に閉山した後は、石見銀山に関わるさまざまな文化財を保存するために、地元の住民の方々と研究者の先生方、そして行政が一体となって文化財を保護し保存する活動を推し進めてまいりました。これらの活動は豊かな石見銀山の歴史を多くの人々にご理解いただき、地域の子供たちに伝え、そして未来に残していくという文化財愛護理念の根本となる取り組みであると考えております。

今回実施いたしました発掘調査は、主要地方道仁摩瑞穂線の改良工事として新しい県道を敷設する工事が契機となっております。現地は重要伝統的建造物群保存地区に位置するために、新しい道路整備と歴史的景観の調和という点で、また江戸時代の大森町の北側入り口部分にあたるという歴史的な経緯から、遺跡保存の手法についても検討を重ねてまいりました。

調査によって江戸時代の建物や人々の暮らしがわかる貴重な資料が発見され、更には予測されなかった戦国時代から江戸時代の製錬工房の建物跡が存在したことや、古代の土器が出土するなどこの地域の歴史像を豊かにする材料を提供することになりました。本報告書が世界遺産登録の機運を醸成し、また石見銀山の歴史と文化に対する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書を刊行するにあたり、ご協力いただきました地元の皆様や島根県大田土木建築事務所、島根県教育庁文化財課をはじめ、多くの関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月

島根県大田市教育委員会
教育長　松　本　陽　三

序　　文

石見銀山遺跡は16世紀に開発された国内有数の銀山であり、その遺跡は今日、日本を代表する鉱山遺跡として平成14年３月にはユネスコの世界遺産暫定リストに登載された遺跡であります。

開発から400年という長期間にわたって銀が生産され、大正12年に閉山した後は、石見銀山に関わるさまざまな文化財を保存するために、地元の住民の方々と研究者の先生方、そして行政が一体となって文化財を保護し保存する活動を推し進めてまいりました。これらの活動は豊かな石見銀山の歴史を多くの人々にご理解いただき、地域の子供たちに伝え、そして未来に残していくという文化財愛護理念の根本となる取り組みであると考えております。

今回実施いたしました発掘調査は、主要地方道仁摩瑞穂線の改良工事として新しい県道を敷設する工事が契機となっております。現地は重要伝統的建造物群保存地区に位置するために、新しい道路整備と歴史的景観の調和という点で、また江戸時代の大森町の北側入り口部分にあたるという歴史的な経緯から、遺跡保存の手法についても検討を重ねてまいりました。

調査によって江戸時代の建物や人々の暮らしがわかる貴重な資料が発見され、更には予測されなかった戦国時代から江戸時代の製錬工房の建物跡が存在したことや、古代の土器が出土するなどこの地域の歴史像を豊かにする材料を提供することになりました。本報告書が世界遺産登録の機運を醸成し、また石見銀山の歴史と文化に対する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書を刊行するにあたり、ご協力いただきました地元の皆様や島根県大田土木建築事務所、島根県教育庁文化財課をはじめ、多くの関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月

島根県大田市教育委員会
教育長　松　本　陽　三

例　　言

1．本書は、平成11年度から平成14年度に発掘調査を実施した主要地方道仁摩瑞穂線(門谷工区)改良工事に伴う石見銀山遺跡発掘調査宮の前地区の調査概報である。

2．調査は島根県大田土木建築事務所の委託を受けて、大田市教育委員会が実施した。

3．発掘調査は次の組織で実施した。

調　査　員　　大國晴雄（平成11年度）遠藤浩巳（平成12～14年度）
調査補助員　　尾村　勝　松尾賢二
調 査 指 導　　河瀬正利（広島大学文学部）
玉井哲雄（千葉大学工学部）
村上　隆（独立行政法人奈良文化財研究所）
小池伸彦（独立行政法人奈良文化財研究所）
鳥越俊行（岡山大学工学部博士課程）
広江耕史（島根県教育庁文化財課）
池淵俊一（島根県教育庁文化財課）
小野正敏（国立歴史民俗博物館）

4．現地調査及び報告書作成にあたっては、次の方々に指導助言、協力を得た。
細見啓三、高橋好夫、椿　真治、長嶺康典、西尾克己、足立克己、鳥谷芳雄
目次謙一、守岡正司

5．本書の執筆は、第１～２章、第４章を遠藤が、第３章については遠藤・尾村が共同で担当した。編集は大國と協議し、遠藤がおこなった。

6．遺物実測図と写真図版の番号は同一である。

7．本報告書に用いた高度は海抜高であり、方位はすべて国土座標系第Ⅲ系の北方向をさす。

8．本報告書に使用した略記号は以下のとおりである。
ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝跡　　ＳＸ：製錬遺構

9．調査によって得られた資料は、すべて大田市教育委員会で保管している。

本　文　目　次

第１章　調査概要 …… 1

（１）調査の経過　（２）位置と環境

第２章　遺　　構 …… 5

（１）概要　（２）０区・１区・２区・３区

（３）４区・５区　（４）６区・７区・８区

第３章　遺　　物 …… 8

（１）　概要　（２）陶磁器　（３）金属製品

（４）　製錬関連遺物　（５）その他の遺物

第４章　ま と め …… 10

挿　図　目　次

第１図　石見銀山遺跡発掘調査位置図（１／25,000） …… 2

第２図　宮の前地区調査区設定図（１／600） …… 4

第３図　宮の前地区最下面遺構配置図（１／500） …… 11

第４図　宮の前地区０・１区第１遺構面実測図（１／120） …… 12

第５図　宮の前地区０・１区最下遺構面実測図（１／120） …… 13

第６図　宮の前地区２・３区遺構実測図（１／120） …… 14

第７図　宮の前地区４区遺構実測図（１／60） …… 15

第８図　宮の前地区出土陶磁器実測図（１／３） …… 16

第９図　宮の前地区出土遺物実測図（１／２） …… 17

第10図　宮の前地区４区建物出土遺物実測図（１／３、１／２） …… 18

挿　表　目　次

第１表　宮の前地区４区炉跡一覧表 …… 7

第２表　宮の前地区出土遺物観察表（１） …… 19

第３表　宮の前地区出土遺物観察表（２） …… 20

第４表　宮の前地区出土遺物観察表（３） …… 20

図　版　目　次

図版１－１　宮の前地区調査前遠景（南から）
　　２　宮の前地区調査前全景（東から）
図版２－１　宮の前０区遺構検出状況（最下面：南から）
　　２　宮の前地区０区井戸跡検出状況
図版３－１　宮の前地区１区第１遺構面検出状況（西から）
　　２　宮の前地区１区最下遺構面検出状況（西から）
図版４－１　宮の前地区１区井戸跡断面（南から）
　　２　宮の前地区２・３区最下遺構面検出状況（東から）
図版５－１　宮の前地区４区建物跡検出状況（北から）
　　２　宮の前地区４区建物跡検出状況（東から）
図版６－１　宮の前地区４区建物跡・木舞
　　２　宮の前地区４区建物跡・柱痕
　　３　宮の前地区４区建物跡・土壁検出状況
　　４　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０１
図版７－１　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０２・０３
　　２　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０５周辺
　　３　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０６
　　４　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ１９
図版８－１　宮の前地区４区建物跡・要石
　　２　宮の前地区４区建物跡・西溝跡検出状況（南から）
　　３　宮の前地区４区建物跡・北溝跡検出状況（西から）
　　４　宮の前地区４区ＳＸ２１～２４
図版９－１　宮の前地区４区土坑
　　２　宮の前地区４区石臼出土状況
　　３　宮の前地区４区すり鉢周辺
　　４　宮の前地区４区上段建物跡検出状況
図版10－１　宮の前地区５区遺構検出状況
　　２　宮の前地区７区遺構検出状況
図版11－１　宮の前地区６区遺構検出状況
　　２　宮の前地区８区遺構検出状況
図版12－１　宮の前地区出土遺物
　　２　宮の前地区出土遺物
図版13－１　宮の前地区４区建物跡出土遺物（陶磁器）
　　２　宮の前地区４区建物跡出土遺物（金属製品）

第1章　調　査　概　要

（1）調査の経過

主要地方道仁摩瑞穂線改良工事について、平成９年度に事業主体である島根県大田土木建築事務所から工事予定地である門谷工区内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。予定地内はそのほとんどが畑地として利用されていたが、石垣と石積みの側溝を有する宅地跡と推定される平坦地となっており、建物は現存しないが、近世に入り成立した大森町の北端に位置することから、地下には近世以降の遺跡の存在が予測された。協議の結果、まず地下遺構の内容確認を目的に試掘調査を行うこととし、平成９年度に６ヶ所のトレンチを設置し調査を実施した。調査の結果、平坦地からは建物の基礎と考えられる礎石や石列などの遺構が検出され、これらの遺構が概ね近世に造成した整地層上に構築されていることが確認された。また整地層からの出土遺物に古代の須恵器や近世初頭の陶磁器やカラミ（鉱滓：スラグ）などの出土がみられ、下層にはさらに遺構が存在する可能性が高いと判断された。この調査結果により工事予定地内について遺跡の性格を明らかにし埋蔵文化財保護のための発掘調査を実施することとした。

調査期間は平成11年度から14年度までの４ヶ年を予定し、調査対象面積は1,700㎡である。また調査地区は現況の旧宅地区画を利用し、東側から０～８区と称し、市道に近い平坦面から先行して着手し、その後に北側に隣接する一段高く広がる平坦地の調査を併行して実施することとした。

平成11年度は１～３区の南に位置する石垣と南北方向に設置された石積みの側溝の実測と、１～３区の第１遺構面を確認することを目的に発掘調査を行った。石垣については石材や積み方の相違があるという成果が得られ、発掘調査では第１遺構面は耕作等による撹乱が広い範囲で確認されたが、建物の基礎構造の一部と考えられる礎石や石列などの遺構が検出された。

平成12年度は１～３区、５区、６区の調査を行った。１～３区については第１遺構面を掘り下げ下層遺構の確認を行ない、５区、６区については新たに調査を実施した。１～３区の調査では計４面の遺構面を検出し、第３遺構面において第１面の宅地区画がなくなり、側溝を伴う道跡とそれに面して連続する建物跡を検出し、造成の大きな変遷があることが確認された。５区、６区においては第１遺構面で建物跡の基礎となる礎石と柱穴が検出され、このうち６区では第１面の整地層と第２遺構面で須恵器が出土し、溝状遺構が検出されている。

平成13年度は０区、７区、８区の調査を行った。０区は１区の東側の調査区で前年度調査と同様に、計４面の遺構面を検出した。７区では第１面で大規模な溝跡と礎石数個を検出し、下層の調査では平坦地が南側の石垣構築を伴いながら数度の整地が行われていることが確認された。８区は６区の北側に位置する調査区で、土坑・溝状遺構を検出した。

第１図　石見銀山遺跡発掘調査位置図（１／25,000）

（◎宮ノ前地区　１出土谷地区　２於紅ヶ谷地区　３竹田地区）

平成14年度は４区の調査を実施した。この地区は市道に面した０～３区（下段）と石垣をもつ北側の５～８区（上段）という二つの平坦面の間にある高さ約３ｍ前後の斜面を含む調査区である。調査ではこの段差を掘り下げ、石垣構築や造成の状況を把握することを目的に実施した結果、段差の斜面の下層に平坦面と、そこに良好に保存された約４ｍ×約６ｍという規模の建物跡が検出された。この建物は礎石建ちで土壁と木舞の痕跡や建築材の出土から建物構造がわかる遺構であると共に、内部に銀生産に関わる炉が配置されていることが確認された。またこの建物跡の西と下層からは柱穴と考えられるピットが多数検出されている。

４年間の調査の結果、宅地造成や敷地割りの変遷が明らかにされたこと、銀山・仙ノ山から約３㎞離れた地点での銀生産遺跡が確認されたことが大きな成果と考えられる。

（２）位置と環境

石見銀山遺跡は、昭和44年に国指定史跡となった日本有数の銀鉱山遺跡である。宮の前地区は現在の大田市大森町の北端に位置し、西側にほぼ隣接して式内社である城上神社、その西に代官所跡があり、調査地区の南には市道と銀山川が並行するように走っている。調査地は広大な石見銀山遺跡の範囲内であり、重要伝統的建造物群保存地区大森銀山地区内に位置している。

この宮の前地区は江戸時代は邇摩郡佐摩村大森町宮ノ下にあたり、武家屋敷が建ち並び近くには大森上口番所がある地域と推定される。古文書等の文献資料によれば、高木家、池亀家という代官所地役人の住宅や勝源寺所有の屋敷があったことが知られている。

また明治期に作成された字限図から、調査地区とその周囲に、林名・安藤屋敷・茶屋奥左平・田中山・山田名・高木名・宮ノ下林名下モ段・宮ノ下中ノ切・殿居畑・黒川田・後藤畑などの地名がみえる。

周辺の遺跡についてはほとんどが未解明であるが、分布調査によって石塔などの石造物や城上神社の元宮の跡が近年確認されている。発掘調査された遺跡として、城上神社境内地の西側石段に隣接した電線類地中下工事のマンホール部分の調査がある。調査の結果、戦国時代から近現代まで４面の遺構面を検出し、戦国時代から近世近代までの道路とそれに面した建物跡と敷地が検出され、それらが造成を繰り返し構築されていることが明らかになった。この調査によって近世に成立した「大森町」の範囲に戦国時代の遺跡が存在するという大きな成果が得られ、町の成立を戦国時代に遡り検討する必要があることを示すことになった。また宮の前地区の西に位置する仁摩町の門谷地域では、原田遺跡・門谷屋敷遺跡・古市遺跡の調査が行われており、石見銀山遺跡と同時期の門谷屋敷遺跡では炭窯跡が検出され、当該期の陶磁器などの遺物が出土している

一方、石見銀山遺跡の中心である仙ノ山一帯の発掘調査は着実に進められ、銀生産遺跡とそれに関わる人々の生活の遺跡について解明が進められている。山頂と山麓の遺跡群の調査が並行して行われ、特に戦国時代16世紀末から江戸時代初めを中心に銀山遺跡の様相が明らかにされている。

第２図　宮の前地区調査区設定図（１／600）

第2章　遺　　構

（1）概要（第２・３図）

現地形の状況は東流する銀山川に面して、石垣と石積みの側溝で区画された旧宅地（調査区０～３区）が存在し、北側に隣接して石垣と斜面（４区）を伴う平坦地（５～８区）が位置し、調査地区内外は二段の平坦地となっており、それぞれの地区に建物等の遺構の存在が予測された。

調査によって各地区で存在した建物の遺構面が、表土・耕作土の下層で計１～５面検出された。０～３区では各地区の遺構は敷地割りを伴いながら検出されたが、最下面（３～５面）でこの敷地割りがなくなり、出土した陶磁器の年代観から17世紀初頭前後から17世紀前半と考えられる道跡、溝跡、建物跡が検出されている。これらの遺構配置は上層の遺構面と建物敷地や道の敷設方向は異なっている。

４区は二段の平坦地間の斜面にあたり、この下層では２間×３間という小規模な礎石建ちの建物跡を検出した。この建物が構築された平坦面は二つの段の中間に位置したものが、災害による土石流によって倒壊し、その後の大造成によって二段の平坦地が造られたことが明らかとなった。この建物の性格は建物内に炉跡が整然と配置されていることから、銀製錬工房と考えられ、年代は17世紀初頭前後と推定される。

５～８区では１～３面の遺構面を検出している。５区では第１遺構面が厚い造成土によって構築され、その下層に戦国時代末から江戸時代にかけてのピット群が検出され、掘立柱建物跡になると考えられる。この遺構は４区の建物跡と同時期になると推測される。６・８区では江戸時代と推定される溝状遺構や土坑、ピット群が検出されている。６区の最下面は地山となり、この面で須恵器が出土しピット、溝状遺構などを検出している。７区は４区の北側に位置する調査区で、調査区の北側は丘陵斜面裾となっている。調査区内の最も北寄りで平坦面に掘り込まれた大規模な溝状遺構を検出している。またこの平坦面の南の整地層は何層にもわたり北側からの流入土による堆積が見られ、これが４区の土石流の堆積土層と同一であることが判明した。

（2）０区・１区・２区・３区（第４・５・６図）

第１遺構面で近代まで存在した建物の遺構が検出されている。１区は間口約21m、奥行き17m、２区は間口約17m、奥行き18m、３区は間口約18m、奥行き17mの敷地で全体に遺構ののこりは良くないものの、建物の基礎構造や配置を示す遺構が検出されている。この０～３区については、敷地割りの区画がのこされたまま第１面の下層で第２遺構面を検出している。

１区第１遺構面では敷地北側に井戸跡とその周囲に南北約5.2m、東西約2.6mの範囲の石敷を検出している。この石敷から東に向かって石列で構築された側溝が、また石敷の西に東西約4.6m、南北約2.6mの規模をもつ建物の基礎と考えられる切石の石列が位置している。この建物は間仕切と考えられる石列があることや、土坑を内部にもつことから便所

の建物と考えられる。これらの遺構は建物背後に位置する構造物と考えられる。敷地の南端では土塀あるいは板塀の痕跡とみられる長さ約５ｍの礎石列があり、この礎石間距離は約1.6ｍとなっている。また敷地南端では玄関口と思われる敷石を検出している。またこの第１遺構面で２・３区の第３～４遺構面で検出された溝の延長と思われる溝状遺構を検出している。

０～１区の最下遺構面に関しては、北東から南西にかけて長さ約12ｍ、幅約50～60㎝、深さ約15～30㎝の溝跡を検出している。この溝跡には北側の一部に３～４段の石積みがみられ、この溝跡の南側では掘立柱建物の柱穴と考えられるピット群を検出している。この溝跡の方向と建物跡は平行した位置関係にあり、溝跡は敷地割りの区画溝と考えられる。また柱穴は平面形が楕円形の大きなものと円形のものに分けられること、また円形のものの中に礎盤と考えられる平坦な石を置くタイプと、柱の周囲に根石をつめたものがあることから、時期差や構造の違いをみることができる。０区と１区で２基の石積み井戸を確認し、０区のものは内径約60㎝、１区は約70㎝とほぼ同規模で、花崗岩の自然石を使用している点など類似している。

２～３区の最下遺構面では平面でＬ字になる道跡とその北側に位置し側溝と考えられる溝跡を検出している。道跡は幅約1.4ｍ前後を測り、溝跡は幅約60㎝前後で総延長約26ｍにわたって検出された。この溝跡と並行して石垣の基底部と考えられる石列が部分的に確認されているが、平行しない部分があることから構築の時期差による可能性がある。この道跡と溝跡の北側には、石列と平行を位置関係になる礎盤をもつ柱穴が約２ｍ（１間）間隔で約22ｍの長さで確認されたが、これは２～３棟分の建物の遺構と考えられる。石垣を伴った平坦地に、同様の規模、構造の建物が連続して建ち並んだ可能性を示している。この道跡の南側に面して、建物の構造は判明しないが、礎石とピットを部分的に検出した建物群がある。おそらく２棟以上になると考えられる。復原するだけの十分な資料は得られていないが、建物内部と考えられる土間面で、炉跡群と石組の方形土坑、溝状遺構を検出している。このうち石組の方形土坑は内法が約60㎝×50㎝の方形を呈し、石組は１段の自然石の石列によって構築されている。またこの石組土坑に隣接して南北方向の幅約50㎝、長さ約4.8ｍの溝状遺構が存在する。この周囲には数基の炉跡が位置することから、一体となって機能した製錬遺構の可能性が高く、今後炉跡の科学的な分析によって遺構の性格を明らかにする必要がある。

（３）４区・５区（第７図）

４区の調査では、南北方向に造成された小規模な平坦地と桁行３間梁間２間（６ｍ×４ｍ）の礎石建ちの建物跡を検出している。礎石間距離は半間間隔であるが、北側の東西方向の礎石列は１間になるかもしれない。この建物の構造については、礎石の間に木舞と考えられる竹の痕跡が土間面上に良く残り、土壁の痕跡も幅10㎝前後で検出している。建物内部から出土した遺物に杉板が大量に出土していることから、これが屋根材になると考えられる。建物跡の周囲には北側に溝跡ＳＤ０１、０３が、西側にＳＤ０２が位置している。このうち検出した礎石建物跡に伴う溝はＳＤ０１とＳＤ０２で、ＳＤ０３は位置関係と堆

積土層からＳＤ０１、０２より一時期古い遺構と考えられる。

建物内部からは、製錬遺構である炉跡を20基、土坑２基、土間に埋め込まれた要石（すり臼）を検出している。炉跡は平面形、規模、炉内埋土、粘土貼りの有無、下部構造などによっていくつかのタイプに分けられる。これは機能の違いを反映したものと考えられるが、今後の検討が必要である。炉跡は切り合い関係からほぼ同じ位置で造り替えたと考えられるもの、操業後に廃棄され土間土で埋められたと考えられるものなどがありそれぞれの検出状況についても違いがみられる。

炉跡No	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	粘土貼りの状況	被熱	礫敷	容器・埋土の状況・調査者所見等
ＳＸ０１	隅丸方形	40×38	7	×	×	×	木枠埋設、埋土は炭層と礫混じりの粘質土
ＳＸ０２	円形	直径50	17	全面	×	○	埋土に炭層と灰状の層あり
ＳＸ０３	楕円形	70×60	25	全面	×	○	上部に薄い炭層
ＳＸ０４	不整形	50×46	9	×	不明	不明	炉跡ではない(？)
ＳＸ０５	楕円形	90×70	6	全面	○	×	底部に緻密な灰層と被熱した白色粘土
ＳＸ０６	方形	90×70	17	○	○	×	淡黄色粘土で構築埋土は炭層(上)と灰状の層(下)
ＳＸ０７	円形	直径28	10	側面	○	×	
ＳＸ０８	円形	直径20	3	×	○	×	埋土の上層と下層が炭層
ＳＸ０９	円形	直径20	3	×	不明	不明	
ＳＸ１０	円形	直径36	5	×	○	×	底部が被熱
ＳＸ１１	円形	直径54	4	×	×	×	底部に薄い灰状の層
ＳＸ１２	楕円形	80×60	10	○	○	×	灰状の層あり
ＳＸ１３	楕円形	60×30	10	側面	×	×	上部に二層の炭層
ＳＸ１４	円形	直径54	未堀	×	不明	不明	
ＳＸ１５	円形	直径18	未堀	×	不明	不明	
ＳＸ１６	円形	直径12	未堀	○	不明	不明	
ＳＸ１７	楕円形	60×46	未堀	×	不明	不明	
ＳＸ１８	方形	40×30	未堀	○	不明	不明	黄色粘土で構築
ＳＸ１９	円形	直径20	5	全面	×	×	埋土は緻密な炭層の単層
ＳＸ２０	円形	直径63	5	×	×	×	埋土から製錬道具出土
ＳＸ２１	円形	直径22	6	×	×	×	埋土は緻密な灰と炭粉の単層
ＳＸ２２	正方形	一辺40	6	側面	×	×	埋土はカラミを多量に含む砂礫
ＳＸ２３	方形	一辺30	6	×	×	×	隣接して石列・杭を検出
ＳＸ２４	円形	直径50	35	×	×	×	

第１表　宮の前地区４区炉跡一覧表

（４）６区・７区・８区

６区は整地面で検出された遺構と地山面の遺構がある。整地面では柱穴と考えられるピット群と礎石が１基検出されている。この整地面の下層が地山となり、この面でピット群と溝状遺構が５基検出されている。８区は６区の北側に隣接する調査地区で、土坑が４基、溝状遺構３基とピット群が検出されている。これらの遺構は地山面で検出されており、地山は北から南に傾斜して下がっているので、８区の遺構は６区の整地面上の遺構とつながる位置になる。

７区では、地山を削平した平坦面と、数回の造成の痕跡が確認されている。平坦面では溝状遺構と礎石数基が検出されている。溝状遺構は断面がＶ字状を呈し、溝幅は上端で1.5m前後、下端で0.5m前後、深さ1.2m前後を測る。この溝状遺構内の埋土からは17世紀前半代の年代観をもつ陶磁器が出土しており、概ねこの時期を下らない時期に埋まったものと推測される。

第3章　遺　　物

（1）概　　要

出土した遺物には、陶磁器、金属製品、木製品、石製品、製錬関連遺物などがある。このうち、陶磁器については調査地区全域で、また各遺構面及び整地層から出土している。概ねその年代については16世紀後半から近現代までの年代観をもつものが大半であるが、16世紀後半以前と考えられる貿易陶磁が若干ある。また古代に遡る須恵器についても４区・６区・７区から出土している。

金属製品については、全域から出土しているが、注目されるのは４区出土の遺物である。特に製錬に使用された道具類は保存状態が良好で、炉跡などの遺構と共に当時の作業を復原する資料となる。木製品については、各調査区から出土しているが、曲物など日用品の他には建築材が注目され、４区では屋根材と考えられる杉板が大量に出土している。また石製品には臼、砥石など生活に伴うものの他、墓石などがある。なお、製錬関連遺物は０～３区の第４面を中心に出土している。

出土遺物ついては、戦国時代、16世紀後半から近現代に至る年代幅をもち、生活と製錬などの作業に伴う、多種多様なものが出土している。銀山の本体である仙ノ山一帯の出土遺物と比較すると、組成の面から、より「町」の様相を示す、あるいは江戸遺跡などと同様の「都市」的な消費地の遺物群と考えられる。

（2）陶 磁 器（第８・10図）

貿易陶磁としては、中国では景徳鎮窯の青花碗、皿類、龍泉窯の青磁、華南漳州系の皿類など、大坂城編年でいう豊臣前期にみられる形態が多い。朝鮮では李朝中期以降の青磁、白磁類、陶胎の井戸系茶碗が多く、粉青沙器も出土している。また東南アジア系では、華南三彩の紅皿、タイ産の四耳壷などの出土がみられ、特筆すべき点である。このタイ産の四耳壷については、戦国時代に火薬の原料である硝石の貯蔵、運搬のための容器として日本へ輸入されたもので、その後は他用途に転用されたものと考えられている。島根県内では広瀬町の富田川河床遺跡からの出土がみられる。

国内産としては、肥前系の陶磁がかなり多く、皿、碗、片口、瓶、壷、甕など多種多様である。主なものに17世紀以前と推定される岸岳窯の形態のものもあり、時期幅も広いように考えられる。備前系は大半が甕、壷、すり鉢といった比較的大物に限られ、例外的にはへそ徳利などがある。瀬戸美濃系では、17世紀前後の織部、志野の向付や黄瀬戸なぶり口の皿、黒瀬戸の天目碗などの出土が多い。特異なものとしては焼塩壷や伊万里の高麗人形、瀬戸焼のままごと道具などが出土している。これらの陶磁器と共伴して出土するカワラケについては、大半が灯明皿として使用されたものである。

０～３区における遺構面ごとに陶磁器の産地、年代などの様相は以下のように概観できる。まず第１面と第２面については貿易陶磁、国内陶磁ともに混在して出土しているが、中でも肥前陶磁の割合が非常に高く、年代も17世紀後半から19世紀前半と幅がある。第３

面もやはり肥前陶磁は多いが、絵唐津皿、初期伊万里皿など肥前陶磁のなかでも前期（17世紀前半）にあたるものがあり、瀬戸、志野などもわずかであるが混在している。

第４～５面は、肥前陶磁は含まず、中国青花や李朝白磁、タイ産四耳壷など貿易陶磁や、瀬戸美濃が主なものである。これらは中国青花の精製、粗製の編年から16世紀第３～４四半期の年代観をもつものである。

４区出土陶磁器については、０～３区の第４面と産地、年代について同様の傾向を示している。組成は碗・皿類が大半を占めている。

（３）金属製品（第９・10図）

鉄製品、銅製品がある。鉄製品では、鉄鍋、ツルハシ、タガネ、小型の鎚、小柄の刀身などの道具類、釘、鋏、野矢の雁股、肘坪など建物に関連するものがある。道具類では４区建物の炉跡内から製錬用道具と考えられる長さ約23cmの鉄製品（図10－64）が出土しており、木製の柄をつけるソケット状の空洞をもち、先端部は不完全であるがスプーン状の形態が復原される。近世の文献史料にみえる「ちび」になる可能性がある。また鉄鍋（図10－63）が４区から出土しており、調理用の鉄鍋が製錬用に転用して使用されたものと考えられる。また４区からは鉛製の鉄砲玉とその鋳型の一部と考えられる鉄製品（図10－61・62）が共伴して出土している。

銅製品はキセル、コウガイ、和鏡片、小柄、錠前、分銅、銭貨など多種に及ぶ。このうち和鏡片（図10－60）は小型のもので柄鏡になると考えられる。銭貨は永楽通宝、洪武通宝などの中国銭や新旧の寛永通宝、無紋銭がある。このうち無紋銭は４区だけでも400枚以上が出土しており、鋳造や流通を考える上で注目される資料となっている。

（４）製錬関連遺物

製錬関連遺物としては、羽口片、炉壁片、るつぼ片、土製品、カラミなどがある。羽口片は数点であるが、いずれも断面が方形になるタイプである。るつぼは小型の碗形になるものと、広口で底部に向けて細くなるタイプがある。土製品は性格不明であるが板状のものが数点あり、金属の付着がみられる。調査地区全域から出土しているものに、製錬作業で排出されるカラミ（鉱滓・スラグ）があり、これは作業で排出されたものと、整地などのために外部から運ばれたものの二種が考えられる。

（５）その他の遺物

木製品は全般的に良い保存状態で出土している。高台の低い漆椀や下駄、櫛、駒、曲物といった日用品や、屋根材と考えられる薄い板材が多数ある。石製品については、宝篋印塔、臼、硯、砥石、碁石などがある。宝篋印塔は室町時代の年代観のある部材が５点認められた。硯は10点出土しているが、その中には下関産の赤間石を使用したものがある。

第4章　まとめ

宮の前地区の調査成果についてはまず4区で製錬建物跡を検出したことがあげられる。

この建物跡の性格は、炉については規模・炉内埋土・構造などから、これまで数多く検出された石見銀山遺跡の銀製錬遺構と対比してみても銀製錬の炉と推定され、土壁の痕跡や土間上の多量の炭などから銀製錬をおこなった建物＝工房と考えられる。さらに建物の規模が2間（約4ｍ）×3間（約6ｍ）で小規模であり、出土遺物にカラミが少ないことなどを考慮すれば、銀生産工程の中でも二次精錬、つまり精錬された銀の品位を調整する工程（抽出された銀の品位をあげる、または銅などを加え統一した銀品位にする、など）を担った工房の可能性がある。

また工房内での作業は今後の類例調査や科学的な分析を待たなければならないが、多量の無紋銭や鉄砲玉とその鋳型の出土などに関連づけて検討する必要が生じることも予測される。いずれにしても銀山遺跡の製錬工房の中ではこれまで検出されなかった「特異なもの」である。

なお、この工房建物跡は剥ぎ取りによって原寸大の考古資料とした。

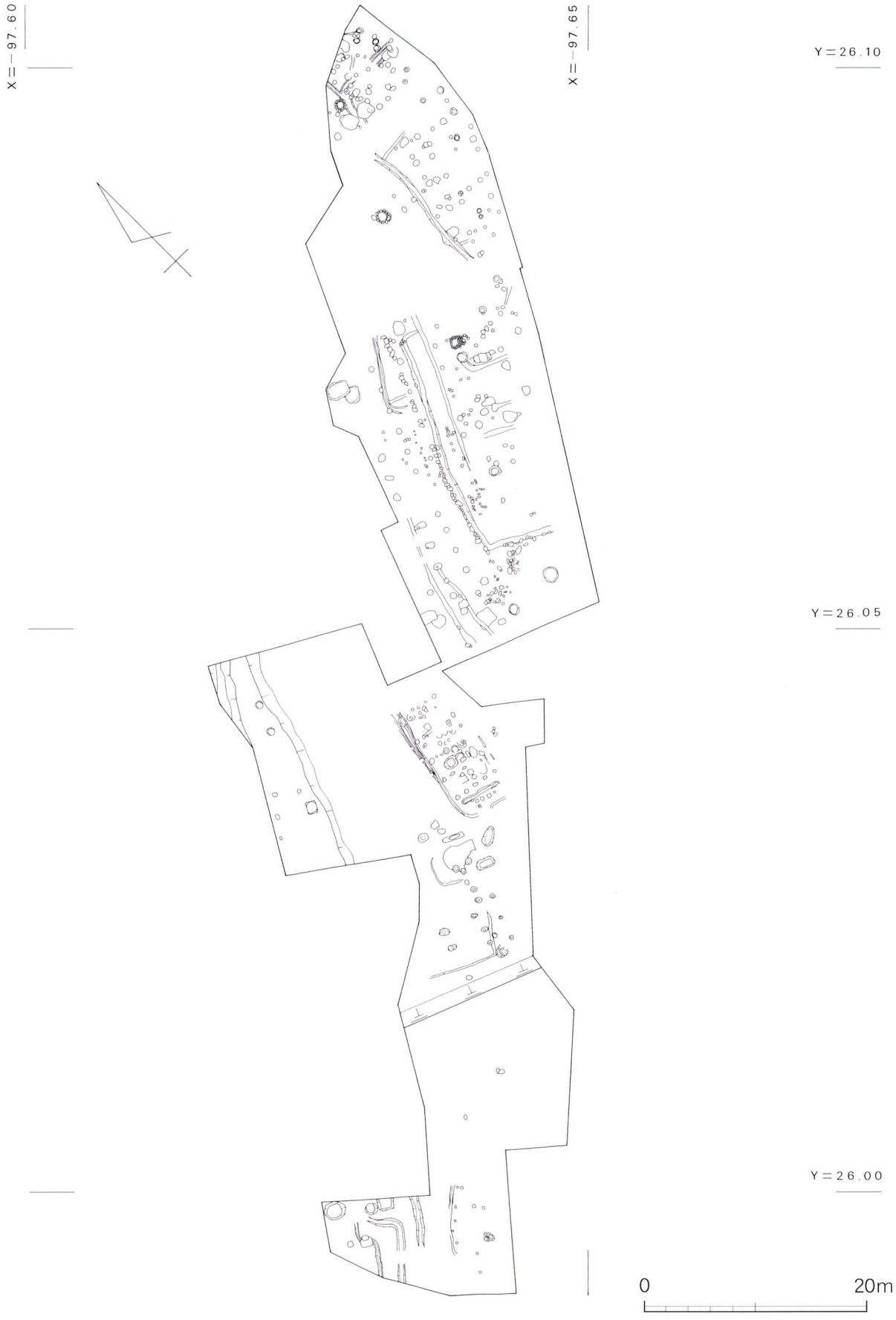
次に、調査地区を中心に土地造成の変遷が確認されたことがあげられる。江戸時代を通じて、大きく二回の大規模造成工事が行われ、道路と建物が配置されていることが判明し、戦国時代末から江戸時代初頭にかけて最初の造成工事が行われている。

おそらく銀山最盛期の毛利氏支配下、あるいは江戸幕府直轄となった時期に、計画的な町立てが実施されたものと考えられる。その契機は銀山の盛山による銀山町・大森町の新たな支配管理、または水害による銀山川の氾濫後の造成などが想定されよう。

次の大規模造成は江戸時代後半の時期と推察され、現代まで続く道路・宅地である。これは水害による銀山川の氾濫である可能性が高い。

このような大規模造成の状況や変遷が把握できたことに併せて、時代を遡る古代・中世の遺物が出土したこともこの地域の歴史資料として意義がある。

調査の結果から遺構・遺物が複雑で多種多様であることが判明し、今後は整理作業を進めて宮の前地区の遺跡についてより具体的に内容を明らかにし、石見銀山遺跡の全体の中での位置が必要である。



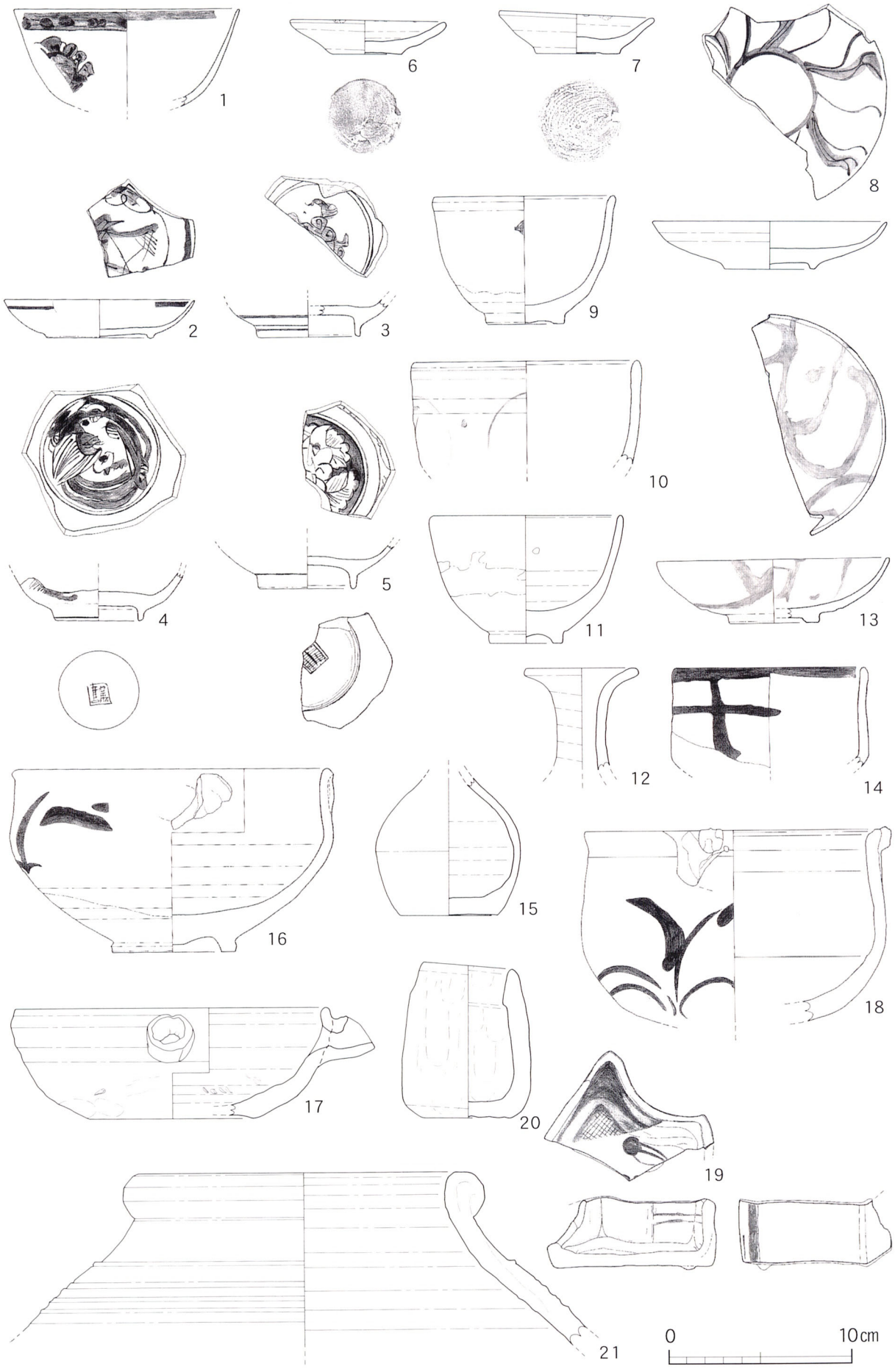
第３図　宮の前地区最下面遺構配置図（１／500）

第４図　宮の前地区０・１区第１遺構面実測図（１／120）

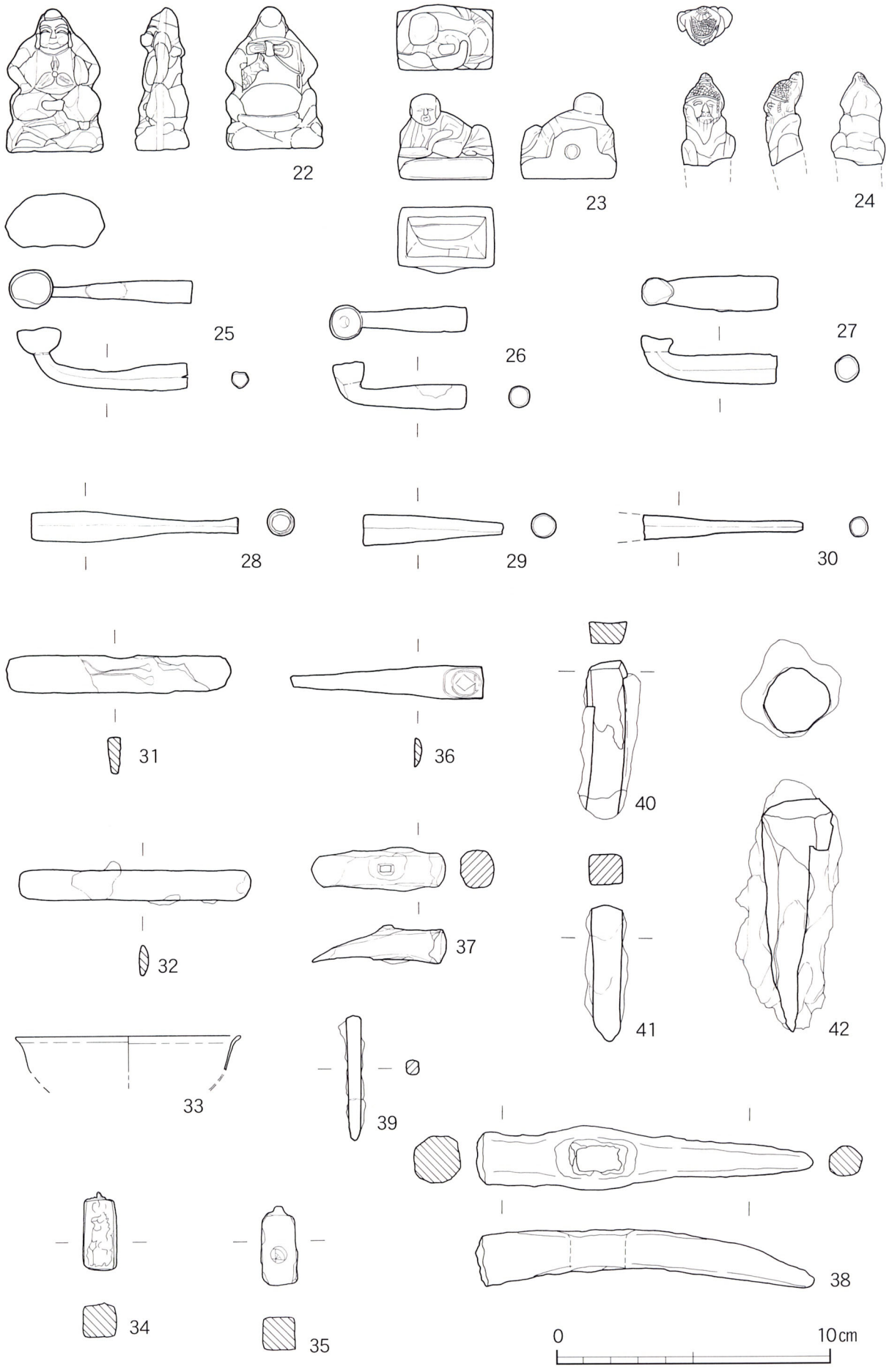
第５図　宮の前地区０区・１区最下遺構面実測図（１／120）

第６図　宮の前地区２区・３区遺構実測図（１／120）

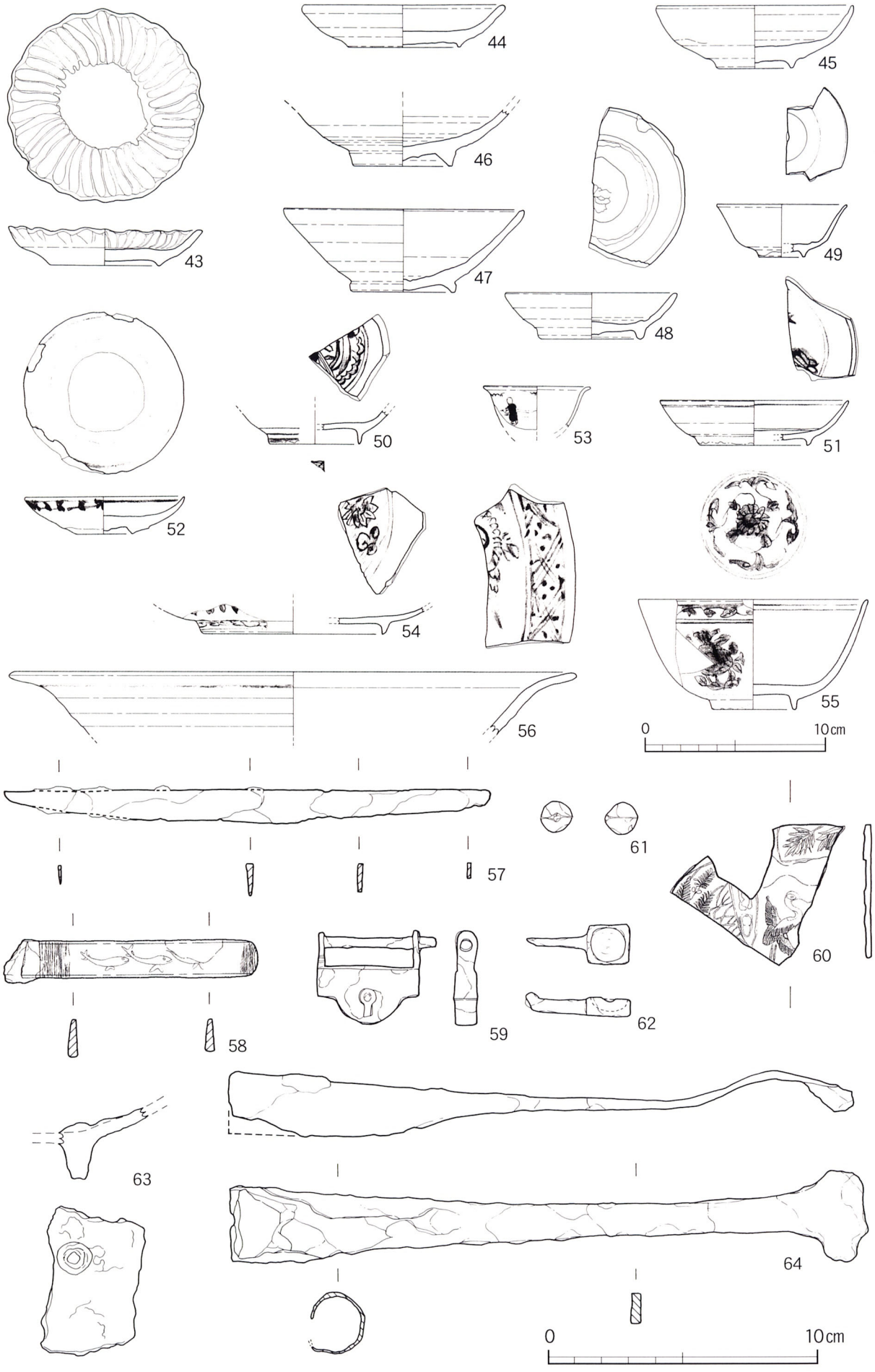
第７図　宮の前地区４区遺構実測図（１／60）
（・印は木舞）



第８図　宮の前地区出土陶磁器実測図（１／３）



第９図　宮の前地区出土遺物実測図（１／２）



第10図　宮の前地区４区建物出土遺物実測図（上：１／３、下：１／２）

挿図番号	区別	出土地点	種別	器種	法量（cm）			色調 重量 （グラム）	成形・調整・文様	備考
					口径	器高	底径			
1	1区	D－第3面.SP16内	輸入磁器	青花碗	(12.2)			透明釉	型打成形.外面花文有 見込み部染付有	16C末～17C初
2	2区	A－第3面溝石敷	輸入磁器	青花皿	(10.4)	(2.1)	(5.1)	透明釉（青灰色）	型打成形.砂目付着	
3	2区	D－第4面整地層	輸入磁器	青花碗			(5.6)	透明釉 （淡青灰色）	（内）二重円に花文 （外）高台見込み文字	饅頭心.16C中～後半
4	2区	C－第4面整地層	輸入磁器	青花碗			4.8	淡青色	内面底龍の絵	玉取獅子虫喰.饅頭心 16C中～後半
5	2区	D－第4面.SK01内.No8	輸入磁器	青花碗			(5.4)	透明釉	高台内「銘」有 草花文様	16C中～後半
6	3区	C.表採	土師質	灯明皿	8.5	1.9	3.8	浅黄橙色	口縁端部油脂状煤付着 底部絞り痕.化粧塗り	
7	3区	C.表採	土師質	灯明皿	8.6	2.3	4.6	橙色	口縁端部煤付着.底面 糸切り痕.化粧塗り	
8	2区	D－第1面	肥前系磁器	皿	(12.7)	2.6	(4.9	透明釉	内面ねじれ花文様染付 高台畳付砂目付着・釉剥	初期伊万里 (1630～1650)
9	2区	A－第3面溝内.No1	肥前系陶器	碗	(10.0)	7.0	4.3	灰釉（灰黄褐色）	口縁端部外反気味 外面文様有	唐津碗
10	3区	E－第2面整地層	肥前系陶器	碗	(12.0)			透明釉 （オリーブ灰色）	鉄絵.唐草文様	絵唐津.17世紀後半
11	1区	D－b－第3面	肥前系陶器	天目碗	(10.6)	7.0	(4.0	鉄釉：黒褐色	体部屈曲	唐津天目
12	1区	C－b－第3面整地層	肥前系陶器	瓶			2.9	鉄釉		16C末～17C初
13	1区	C－第3面	肥前系陶器	皿	(12.6)	3.5	4.8	灰黄色	高台削り.白土化粧	
14	2区	A－第3面溝内.No7	肥前系陶器	碗	(10.3)			藁灰釉	口縁部・外面胴部鉄絵	
15	3区	F.表採	肥前系陶器	徳利			5.4	（内）暗茶褐色 （外）明赤褐色	平底	
16	2区	A－第3面溝内.No2	肥前系陶器	片口鉢	(16.1)			藁灰釉（灰褐色）	外面槌物文様	絵唐津
17	1区	D－b－第3面	不明陶器	片口鉢	(17.0)	6.0	(9.0)	無釉（茶褐色）	外面底部指圧痕 内面工具痕	
18	1区	C－第3面整地層	肥前系陶器	片口鉢	16.9	10.1	6.7	灰釉（茶褐色）	草文鉄絵 見込み部4ヵ所胎土目積	17C初期の唐津
19	1区	D－第3面	瀬戸・美濃陶器	向付				緑釉	内面：鉄絵・文様.外面： 線文様.体部二条の線	織部焼.16世紀末
20	2区	A－第2面整地層石列南	土師質	焼塩壺	7.0	8.5	4.7	明黄褐色	内・外面指圧痕 （手づくね）	
21	2区	D－第4面南礫層	輸入陶器	貯蔵壺	(18.1)			赤褐色	ロクロ成形	タイ産.16C末～17C 初（富田川参考）
22	2区	A－表採	土師質	恵比須像	5.2	3.5	2.0	肌色	型合わせ成形	
23	1区	C－B－第4面	不明陶器	小像製品	3.5	2.4	3.1	褐色	背面穴有り	
24	2区	D－第2面整地層	肥前系磁器	白磁人形灯火具	3.4	2.0	1.3	焼煙痕		伊万里 （Ⅱ-2・1630～1650）
25	2区	C－2面整地層内トレンチ	金属製品	真鍮煙管（雁首）	6.5	1.0	0.5	7.1		Ⅲ期・17C 火皿幅:1.6 厚:0.1
26		土坑	銅製品	煙管（雁首）	1.0	1.1		8.8		Ⅴ期・18C後半
27	0区	第1面	銅製品	煙管（雁首）	4.9	1.2		10.2		Ⅵ期・19C
28	1区	B－第1面整地層	銅製品	煙管（吸口）	7.5	1.0		12.7		
29	1区	D－第2面礫内	銅製品	煙管（吸口）	5.1	0.9		7.7		Ⅲ期・19C
30	3区	B－第1面整地層	銅製品	煙管（吸口）	5.8	1.0		4.7		
31	2区	D－第4面.SK02	銅製品	小柄	8.2	1.4	0.5	10.5	紐状の文様有	
32	1区	D－第3面整地層	銅製品	小柄	8.5	1.1	3.5	13.8		
33	2区	C－第3面整地層	銅製品	皿	8.2					
34	0区	第3面	銅製品	分銅	2.9	1.25		31.0	○印様な刻印有	
35	2区	D－第3面整地層	銅製品	分銅	2.9	1.2		22.8	扇の印有.通し孔なし	
36	2区	B－溝南第4面	銅製品	こうがい	7.0	1.2	0.3	10.3		
37	1区	D－d－第5面	鉄製品	小槌	4.9	1.4		20.7	頭部	
38	4区	F－第3面	鉄製品	ツルハシ	12.3	2.3	1.9	133.3	後方かなり摩耗	
39	1区	表採	鉄製品	釘	4.5					
40	1区	表採	鉄製品	用途不明	5.7	1.7		31.0		
41	3区	F－第4面	鉄製品	ノミ状工具？	5.0	1.1		9.6		
42	2区	第4面.No1	鉄製品	タガネ	9.3	2.6		72.6		

第2表　宮の前地区出土遺物観察表（1）

挿図番号	区別	出土地点	種別	器種	法量（cm）			色調	成形・調整・文様	備考
					口径	器高	底径			
43	4区	E.ＳＤ０１内	瀬戸・美濃陶器	菊花皿	10.7	2.1	6.1	灰釉：オリーブ色	ロクロ成形.全体に貫入	16Ｃ末
44	4区	ＳＢ０１.南西隅外第２面	瀬戸・美濃陶器	丸皿	11.3	2.4	6.2	灰釉：オリーブ黄色	ロクロ成形.底部蛇ノ目	大窯第５～６小期（永禄～天正）
45	4区	ＳＢ０１.ＳＸ０１周辺③	肥前系陶器	丸皿	(11.0)	3.4	(4.1)	灰釉：濃緑色	ロクロ成形.砂床置	Ｉ-１期（1580～98）
46	4区	ＳＢ０１.トレンチ内	輸入陶器	李朝皿			(5.4)	不明	ロクロ成形.三日月高台	李朝中期か
47	4区	C.黒色土下層	輸入陶器	李朝碗	(13.3)	4.6	(5.5)	灰釉：灰白色	ロクロ成形.回転削り	李朝前期の井戸茶碗か
48	4区	２－⑱.黒色土	輸入白磁器	李朝小皿	(9.6)	2.6	(5.6)	透明釉（オリーブ白色）	籾殻敷.蛇ノ目	李朝白磁（16Ｃ中）
49	4区	B.西溝（暗灰白色粘土）	輸入白磁器	小坏	(7.2)	2.9	(2.4)	透明釉	ロクロ成形.見込蛇ノ目	16Ｃ後半
50	4区	A.黄色包含層内	輸入磁器	青花碗			(5.0)	透明釉	交龍文.饅頭心	Ｅ群.豊臣前期
51	4区	ＳＢ０１.２-①.黒色土	輸入磁器	青花皿	(10.5)	2.5	(6.0)	透明釉	ロクロ成形.砂目付着	Ｂ２群（16Ｃ後半）
52	4区	ＳＢ０１.２－⑱.第２面	輸入磁器	青花小皿	8.9	2.1	3.1	透明釉	碁笥底.見込釉剥ぎ	豊臣前期
53	4区	ＳＢ０１.２-⑱.第２面黒色土	輸入磁器	青花小坏	(6.0)			透明釉	口縁外反.人物文様	上田Ａ-Ⅳ群（16Ｃ末か）
54	4区	B.土間面.№６	輸入磁器	青花大皿			(9.9)	透明釉	草花文様.砂目付着	Ｅ群（16Ｃ末～17Ｃ初）
55	4区	ＳＢ０１.２-⑭.黒色土	輸入磁器	青花碗	(12.9)	6.1	4.8	透明釉	草文様	Ｅ群.豊臣前期
56	4区	２－⑯	輸入磁器	青花大皿	(31.6)			透明釉	四方襷文様	16Ｃ末～17Ｃ初

第３表　宮の前地区出土遺物観察表（２）

挿図番号	区別	出土地点	種別	器種	法量（cm）			重量（グラム）	備考
					現存長	最大幅	最大厚		
57	4区	ＳＢ０１.床面上層	鉄製品	小柄の刀身	17.8	1.2	0.3	14.4	
58	4区	２－⑰.黒色土	銅製品	小柄	9.3	1.3	0.4	19	魚文様の刻文
59	4区	ＳＢ０１.北側床面	銅製品	錠前	3.4	4.2	0.9	24.8	鍵穴（1.0×0.6）
60	4区	B.黒色土	銅製品	鏡	5.0		0.3		鶴・稲穂文様
61	4区	D.黒色土中	鉛製品	鉄砲玉		1.2×1.2		5.5	接合部有（4521と関連）
62	4区	D.黒色土中	鉄製品	鉄砲玉鋳型	3.8	1.5	0.7	6.2	穴径（1.2×1.2）深さ（0.45）
63	4区	ＳＢ０１.北側	鉄製品	脚付鍋	（脚）1.3	（脚）1.2	（脚底部）0.5		脚底部円状窪み
64	4区	ＳＢ０１.ＳＸ２０内	鉄製品	道具類	23.1	2	2.2	74.7	柄部分巻き込み
57	4区	ＳＢ０１.床面上層	鉄製品	小柄の刀身	17.8	1.2	0.3	14.4	
58	4区	２－⑰.黒色土	銅製品	小柄	9.3	1.3	0.4	19	魚文様の刻文
59	4区	ＳＢ０１.北側床面	銅製品	錠前	3.4	4.2	0.9	24.8	鍵穴（1.0×0.6）
60	4区	B.黒色土	銅製品	鏡	5.0		0.3		鶴・稲穂文様
61	4区	D.黒色土中	鉛製品	鉄砲玉		1.2×1.2		5.5	接合部有（4521と関連）
62	4区	D.黒色土中	鉄製品	鉄砲玉鋳型	3.8	1.5	0.7	6.2	穴径（1.2×1.2）深さ（0.45）
63	4区	ＳＢ０１.北側	鉄製品	脚付鍋	（脚）1.3	（脚）1.2	（脚底部）0.5		脚底部円状窪み
64	4区	ＳＢ０１.ＳＸ２０内	鉄製品	道具類	23.1	2	2.2	74.7	柄部分巻き込み

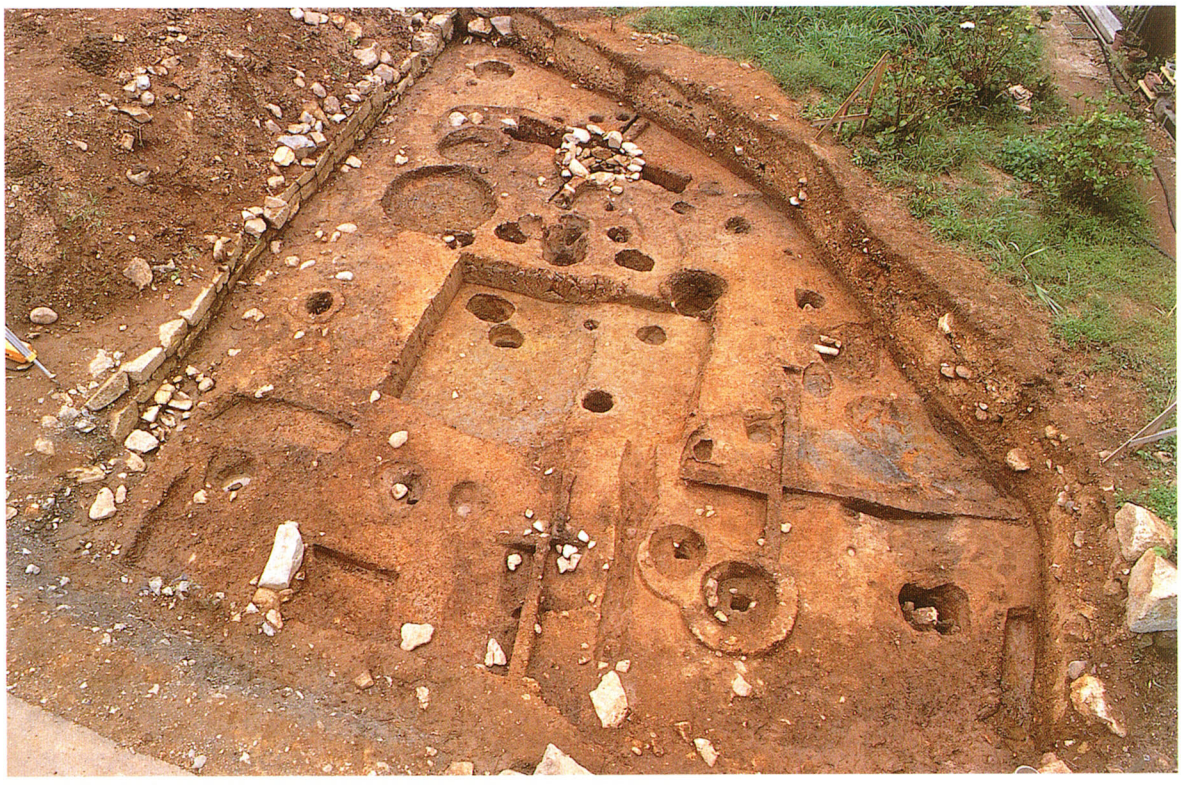
第４表　宮の前地区出土遺物観察表（３）

図　　版

1　宮の前地区調査前遠景（南から）

2　宮の前地区調査前全景（東から）

図版２



１　宮の前０区遺構検出状況（最下面：南から）

２　宮の前地区０区井戸跡検出状況

1　宮の前地区１区第１遺構面検出状況（西から）

2　宮の前地区１区最下遺構面検出状況（西から）

図版４

１　宮の前地区１区井戸跡断面（南から）

２　宮の前地区２・３区最下遺構面検出状況（東から）

１　宮の前地区４区建物跡検出状況（北から）

２　宮の前地区４区建物跡検出状況（東から）

３　宮の前地区４区建物跡・土壁検出状況

１　宮の前地区４区建物跡・木舞

４　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０１

２　宮の前地区４区建物跡・柱痕

3　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０６

1　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０２・０３

4　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ１９

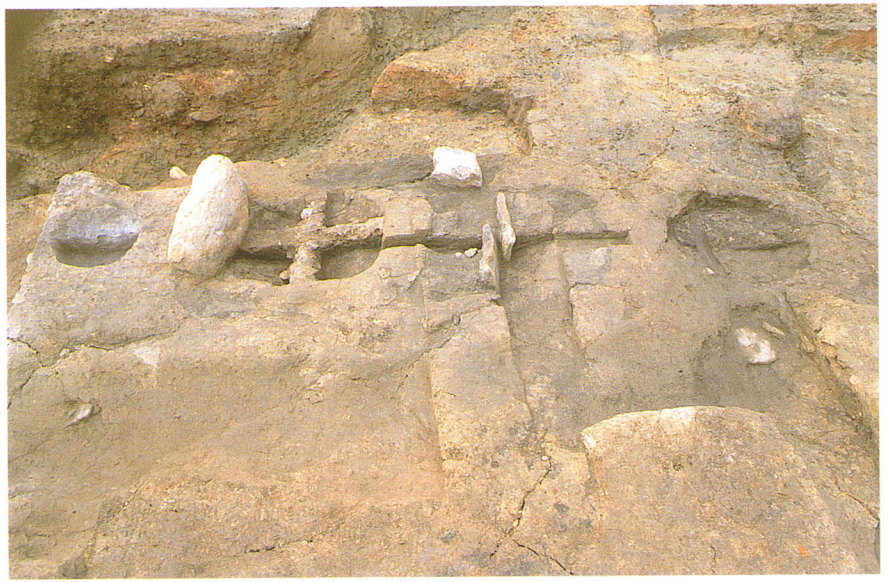
2　宮の前地区４区建物跡・ＳＸ０５周辺

図版７

1　宮の前地区４区建物跡・要石

3　宮の前地区４区建物跡・北溝跡検出状況（西から）

2　宮の前地区４区建物跡・西溝跡検出状況（南から）



4　宮の前地区４区ＳＸ２１～２４

3　宮の前地区４区すり鉢周辺

1　宮の前地区４区土坑

4　宮の前地区４区上段建物跡検出状況

2　宮の前地区４区石臼出土状況

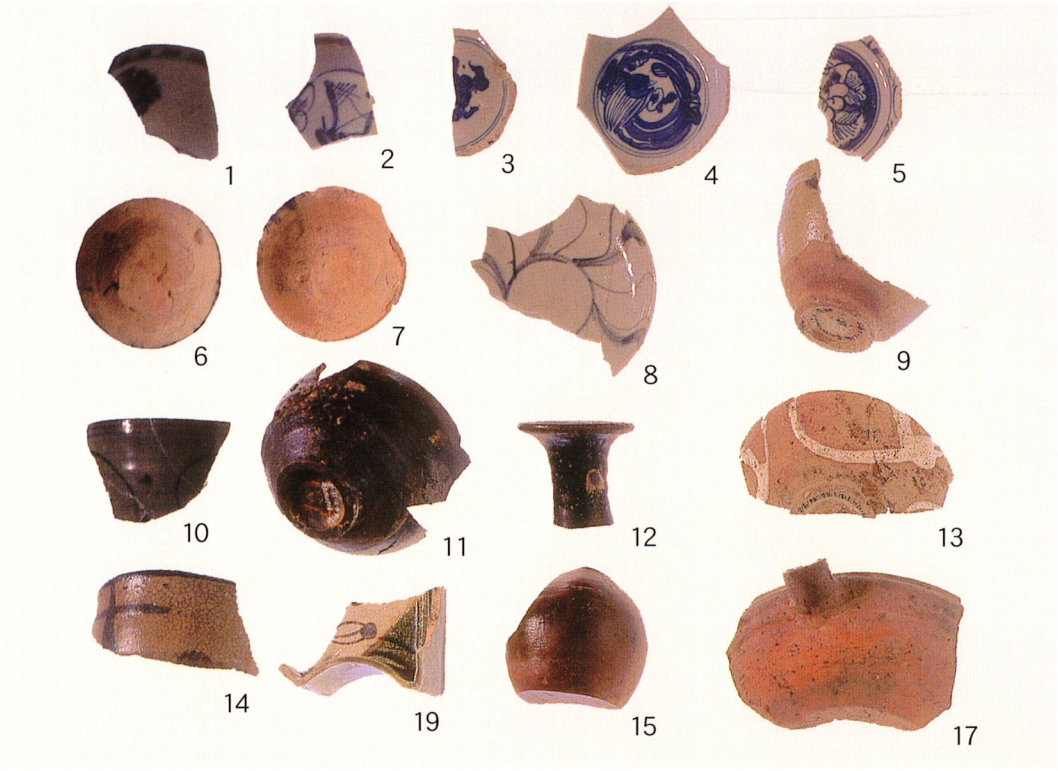
図版10

1　宮の前地区５区遺構検出状況

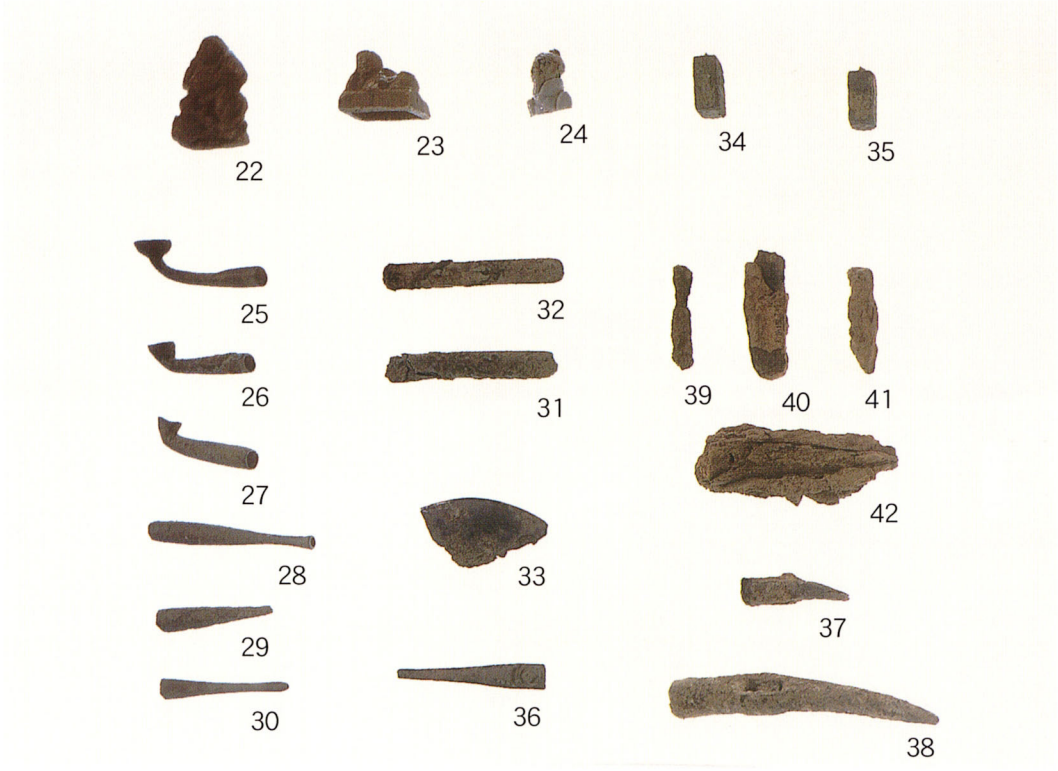
2　宮の前地区７区遺構検出状況

1　宮の前地区６区遺構検出状況

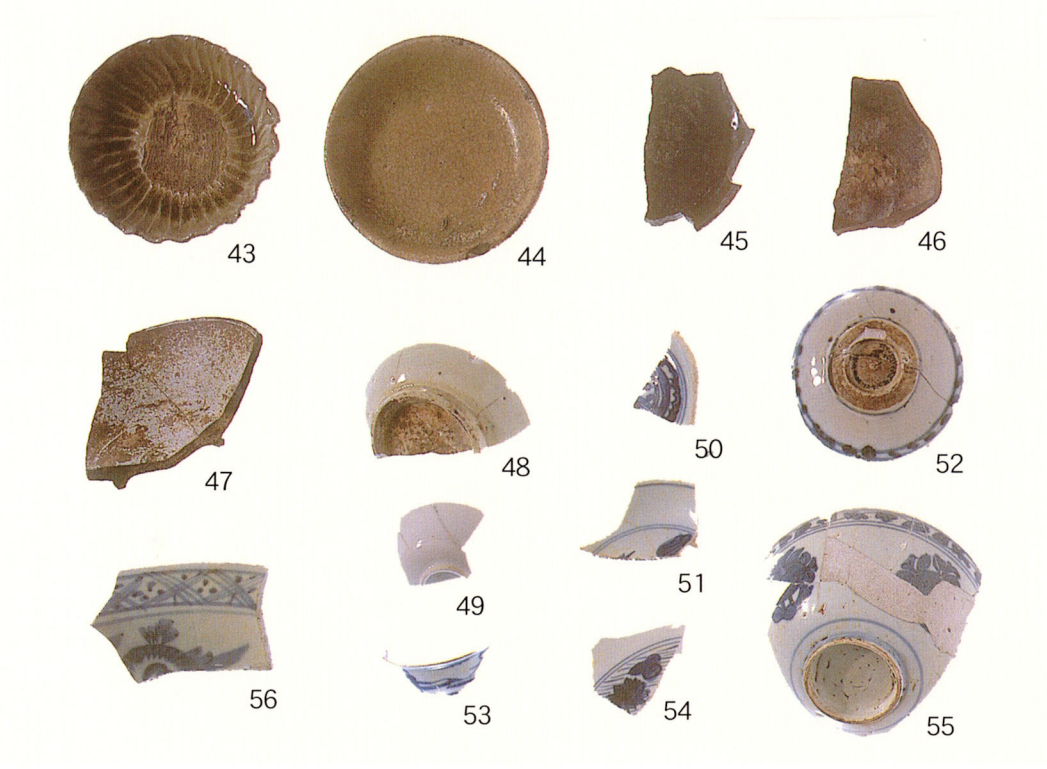
2　宮の前地区８区遺構検出状況



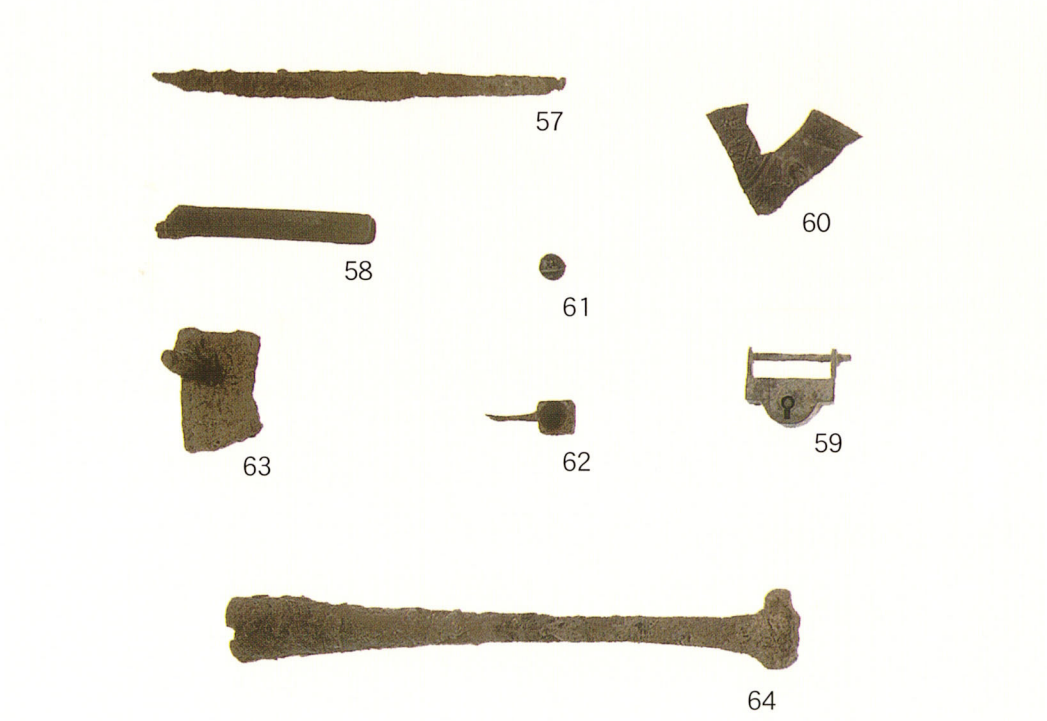
1　宮の前地区出土遺物



2　宮の前地区出土遺物



1　宮の前地区４区建物跡出土遺物（陶磁器）



2　宮の前地区４区建物跡出土遺物（金属製品）

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきはっくつちょうさ
書名	石見銀山遺跡発掘調査
ふりがな	みやのまえちくちょうさがいほう
副書名	宮の前地区調査概報
シリーズ名・巻次	大田市埋蔵文化財調査報告　第29集
編集者名	遠藤浩巳
編集機関	大田市教育委員会
所在地	〒694-0064　島根県大田市大田町大田ロ1,111番地
発行年月日	2003年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間
		市町村	遺跡番号			
石見銀山遺跡（宮の前地区）	島根県大田市大森町	32205		35°7′11″	132°27′50″	1999年3月～2002年10月

調査面積	1,700m²
調査原因	主要地方道仁摩瑞穂線改良工事

所収遺跡	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石見銀山遺跡（宮の前地区）	鉱山遺跡	戦国時代 江戸時代	建物跡 炉跡	陶磁器 金属製品 石製品 木製品 製錬関連遺物	2間×3間の製錬工房建物跡

主要地方道仁摩瑞穂線(門谷工区)改良工事に伴う

石見銀山遺跡発掘調査

－宮の前地区調査概報－

2003年3月

編集・発行　島根県大田市教育委員会
(島根県大田市大田町大田ロ1,111番地)

印刷・製本　急　行　印　刷